環境社会配慮助言委員会
第129回 全体会合

日時 2021年10月4日（月）14:00～15:39

場所 オンライン会議

（独）国際協力機構

助言委員

阿部 直也	東京工業大学 環境・社会理工学院 融合理工学系 准教授
石田 健一	元東京大学 大気海洋研究所 海洋生命科学部門 助教
奥村 重史	有限責任あずさ監査法人 パブリックセクター本部 ディレクター
小椋 健司	元日本高速道路インターナショナル株式会社 プロジェクト担当部長
織田 由紀子	JAWW（日本女性監視機構） 副代表
掛川 三千代	創価大学 経済学部 准教授
源氏田 尚子	公益財団法人 地球環境戦略研究機関（IGES） 東京サステナビリティフォーラム フェロー
作本 直行	独立行政法人 日本貿易振興機構（JETRO）顧問
柴田 裕希	東邦大学 理学部 准教授
島 健治	株式会社三井住友銀行 ホールセール統括部 サステナブルビジネス推進室 上席推進役
鋤柄 直純	一般財団法人 自然環境研究センター 研究本部 研究主幹
田辺 有輝	特定非営利活動法人 「環境・持続社会」研究センター（JACSES） 持続可能な開発と援助プログラム プログラムディレクター
谷本 寿男	元恵泉女学園大学 人間社会学部 教授
寺原 譲治	城西国際大学 環境社会学部 学部長代行／教授
錦澤 滋雄	東京工業大学 環境・社会理工学院 融合理工学系 准教授
長谷川 弘	広島修道大学 人間環境学部・大学院経済科学研究科 教授
原嶋 洋平	拓殖大学 国際学部 教授
日比 保史	一般社団法人 コンサベーション・インターナショナル・ジャパン （CI ジャパン） 代表理事
松本 悟	法政大学 国際文化学部 学部長・教授
山岡 暁	宇都宮大学 地域デザイン科学部 教授
山崎 周	株式会社三菱UFJ銀行 ソリューションプロダクツ部 プロジェクト環境室 室長（環境社会リスク管理）
米田 久美子	一般財団法人 自然環境研究センター 研究本部 フェロー

（敬称略、五十音順）

JICA

馬杉 学治	審査部 次長
小島 岳晴	審査部 環境社会配慮監理課 課長
加藤 健	審査部 環境社会配慮審査課 課長
永井 真希	審査部 環境社会配慮審査課
渡辺 大介	東南アジア・大洋州部 東南アジア第五課 課長

調査団

三品 孝洋	株式会社建設技研インターナショナル
-------	-------------------

幡野 貴之

株式会社建設技研インターナショナル

○小島 皆さん、聞こえますでしょうか。JICA審査部の小島でございます。

14時から助言委員会の全体会合ということで皆さんにお集まりいただいています。いつものことなんですけれども、事前の注意事項を申し上げます。

発言する際は、ミュートを外してからご発言いただくようお願いします。それ以外のときはミュートにさせていただくとありがたいです。逐語議事録をいつものとおり作っていますので、必ずお名乗りいただいた後、座長の指名をお待ちいただくようお願いします。

本日は、助言委員の皆さん全員リモートで参加しておられます。挙手機能も適宜活用いただければと思います。

今日、事業部からの説明があります。なので、質問は私たち審査部事務局あるいは事業部に対するものとなりますので、誰に対する質問か明確にさせていただきますと、間のお互い遠慮し合う沈黙が避けられると思いますので、どうぞよろしくお願いします。発言が終わりましたら、以上ですというふうに言っていただいて、またミュートを再開していただくと円滑に運営できるんじゃないかなと思います。ほかの方が発言されているときはご発言を控えていただくと幸いです。

以上がいつもの注意事項で、今日聞くところによると、停電の中、携帯で参加されている方もおられますので、できるだけ効率的に議事を進めていただけると助かると思いますので、どうぞよろしくお願いします。

では、委員長のようにマイクをお譲りしたいと思います。どうぞよろしくお願いします。

○原嶋委員長 原嶋ですけれども、音声入っていますか。

○小島 ちょっと遠いですけれども、入っています。

○原嶋委員長 遠いですか。大丈夫ですか。

○小島 これでちょうどいいです。ありがとうございます。

○原嶋委員長 改めまして、JICA環境社会配慮助言委員会第129回の全体会合を開催いたします。よろしく申し上げます。

本日、私が承知している範囲では、木口委員がご欠席とのこと。そのほかの委員の皆様は若干入室時間などのタイミングの違いはあるようではありますが、皆さんそれぞれオンラインでご出席いただけるというふうに伺っております。あと、JICAのほうと調査団のほうのご参加でございます。よろしく申し上げます。

それでは、お手元の議事次第に従いまして、ワーキンググループのスケジュール確認ということで事務局からよろしく申し上げます。

○小島 予定については、今投影しているとおりです。11月26日が3名だったんですけれども、今改めて見ますと4名揃っていますので、11月中の予定は大丈夫というところになります。当然ながらいろいろ変更があると思いますので、何かあれば私たち事務局のほうに連絡いただければと思います。

以上です。返します。

○原嶋委員長 それでは、またスケジュールについて詳細、ご都合の関係がありましたら事務局のほうにそれぞれご連絡をお願い申し上げます。

それでは、続きまして、本日はその他ということでフィリピンのパラニャーケ放水路整備事業の

ルート変更についてでございます。

それでは、これは事業部のほうでご説明をまずお願いしてよろしいでしょうか。お願いします。
○渡辺 ありがとうございます。JICA東南アジア・大洋州部第五課でフィリピンを担当しています渡辺と申します。本日はよろしくお願いたします。

今画面に映っておりますが、フィリピンのパラニャーケ放水路整備事業準備調査につきまして、ご紹介いただきましたとおり放水路変更がございますので、そのご説明のためにお時間をいただいております。

目次、本日のご説明内容です。次のページにいきまして背景ですけれども、こちらはおさらいになります。調査は今年の2月に開始されております。その後、3月に全体会合でご紹介させていただき、4月末にスコーピングのためのワーキンググループの委員会を開催、5月14日に助言が確定しているものです。その後、現地フィリピンでの公聴会を実施したところ、調査の中で最適だと推奨されておりましたルート2-Bの、取水と排水予定地の用地取得につきまして、一部の地権者の合意がどうしても得られないという事態が発生しました。

これを受けまして、カウンターパート機関でありますDPWHとは、最適ルートだったルート2-Bは断念するということを決断しまして、諸々の条件を考慮したうえでJICA調査団のほうから新ルート、ルートXと呼ばせていただいておりますけれども、こちらを提案してDPWHの了承を得た状況でございます。本日の会議では、この新ルートXの概要とそのルート変更に伴うスコーピング上の変更点をご説明させていただきます。

次のページです。

調査の背景、こちらも案件概要のおさらいですが、洪水を含む自然災害が非常に多いフィリピンに対し、ラグナ湖沿岸地域、こちらでも浸水被害が多いということで、地下トンネル技術を活用したパラニャーケ放水路整備に関する調査をフィリピン政府からJICAに要請されているものです。

調査の概要ですが、地図の四角で囲っているところを放水路が通る予定です。ラグナ湖が右側の水色の部分で、こちらから左上のマニラ湾に向けて放水路で排水をする計画になっています。

ルートの再検討ですが、最適ルート2-Bというのが地図の緑色の部分でした。ご説明のとおり、現地の公聴会を実施したところ、地権者の合意が得られないということで、カウンターパート機関のDPWHがルート2-Bの採用は難しいと判断し、ルート変更の検討をJICAに要請してきました。それを受けて、地図の黄色がルートXになりますが、こちらをJICA調査団で提案して、フィリピン側の運営委員会での了承を得たという状況になっております。

こちらが変更前のルート2-Bと、変更後のルートXを比べた概要比較表になっています。通過ルートですが、もともとは道路の下と民有地を通る想定だったのが全て民有地の下を通る計画に変更されています。トンネルの延長は多少南に下がったということで、南に行けば行くほど陸地の横断距離が長くなりますので、今回1km程度トンネルの延長が長くなっています。また、トンネル深度は少しもともとよりも深いところを通す計画になっています。移転対象構造物は図面上での推定になりますが、もともと360戸だったものが約200戸になると見込まれています。ラグナ湖側の取水口

ですが、もともとの場所から南へ約1kmの場所になります。

取水口が南に1km、排水口も実質的に南に下がっているんですが、ぐるっと回って最後、左上に上がっていくため、方角としては北西になっています。ただ、全体の計画として南側に放水路の位置が下がって、最後の排水場所だけ少し地図で左上、北西に移設ということになっています。排水施設の構造ですが、もともとのルート2-Bですと、川に開放して放水する計画だったのですが、今回は川ではないところでの排水ということで、海中排水口というものを設けて海に直接排水する予定です。その排水のための小規模の埋立が必要になると見込まれています。

こちらはラグナ湖側の取水口付近を上から見た写真です。住民移転が発生するのは取水施設部分ですが、ここを航空写真で確認したところ、住民移転数が360から恐らく200ぐらいに減るだろうと見込まれています。

こちらが排水側、マニラ湾側の施設になりますが、海に直接排水するというので、そのための施設として少し沿岸部分を埋立たような施設を建設する計画が立てられています。10.48mという文字があります。Mean See Level、平均潮位が10.48mとなっており、付近の海底標高が9.5mぐらいですので、大体この10.5と9.5の差の1mぐらいがこの辺りの水深で、1m程度の浅瀬が多い地域になっていると認識しています。

こちらがルート2-BとルートXを比べたスコーピング案からの変更点です。約1kmほど放水路の延長が延びることになります。また、放水路は、住民への影響が少なくなるように深いところを通す計画になっています。工事工期検討中とありますが、恐らく延長も1km長くなり、もともとの計画よりも深いところを通すということで、工事工期は延びてくると見ておりますが、具体的な工事工期についてはこれから検討していくことになります。

社会環境のところでは用地補償とありますが、50mよりも深いところを通すということで、補償は不要という対象になります。また、住民への影響はその分少なくなると見ています。

その下の取水施設付近での移転家屋数は360戸、1,470人程度が200戸、820人ぐらいになると見込まれています。

自然環境ですが、汽水域とあります。LPPCHEAとあります。スコーピングのワーキンググループ委員の方々はご記憶かもしれません。地図の左上辺りにラムサール湿地条約で指定されて保護されている島があり、LPPCHEAと呼んでいます。もともとのルート2-Bですと、排水される場所からラムサール湿地条約の対象地域まで200mだったんですが、今回の変更によってその距離が350mということで150mほど遠くなる見込みです。

それから、埋立用の施設を建設する計画があるということで、工事中的水質・底質への影響をしっかり確認しなくてはならないと認識しています。また、埋立による生息域や水象への影響の可能性についても調査するという事かと考えています。あと、埋立用の土砂を持ってくる土取り場が必要になってくると思われますので、その影響も確認をする必要があると考えています。

経済性につきましては、延長区間が延びて工期が少し長くなり、深いところを通すということでコストは上がる、工期も少し延びると見ております。

次のページからまた個別に今ご説明している点をハイライトしています。

一つ目は廃棄物で、ルート変更後を青でマーカーしていますが、トンネル延長が1km増え、掘削残土が増えると想定されます。他方で、排水施設用の埋立土砂を供給する土取り場が必要になるということです。廃棄物として土が多く出るとということと、対照的に埋立用の土砂が必要になるということが影響として考えられております。

生態系ですけれども、排水施設が海上の埋立地に建設されるということですので、その土取り場の影響を考える必要があるということと、排水施設建設そのものによる生息域及び海流変化に影響を与える可能性が考えられております。

最後、水象ですが、排水施設（埋立）によってマニラ湾の海流に影響を与える可能性があるということで、調査するという事になってまいります。これによりまして、環境社会配慮調査の基本方針に以下が追加されるという記載をさせていただいていますが、工事中の土取り場候補地の探索及び採土による環境社会影響評価を行うということと、供用時には埋立による海流変化の確認を行うということが変更になってくると考えています。

これらを踏まえたスケジュールですけれども、現在10月でスコーピング変更に関するご説明をさせていただいております。今後、環境社会配慮調査を含めた調査を進めまして、来年の2月頃、ドラフトファイナルレポートに基づくご説明の機会をいただくことを想定しております。

前回スコーピングワーキンググループを開催いただいたときのご助言いただいている点をこちらにご参考として記載しています。

ご説明は以上となります。ありがとうございました。

○原嶋委員長 音声、聞こえていますか。

○小島 聞こえております。

○原嶋委員長 どうもありがとうございます。

それでは、既にお手が挙がっております。ちょっと確認して進めさせていただきます。

それでは、早速サインをいただいておりますので、小椋委員からお願いしてよろしいでしょうか。

○小椋委員 小椋でございます。ご説明ありがとうございました。大変わかりやすい資料でありがとうございます。

私のほうは社会配慮を2点教えてください。まだ今のスケジュールでいうとRAPも取りまとめの最中なので、ひょっとしたらご回答いただけないかもわかりませんが、2点教えてください。

1点目は50mより深いということで、日本のようないわゆる大深度の地下利用の法制度のようなものがフィリピンにあるのかどうかという根拠法の話をして1点教えてください。

それから、2点目は説明いただいた取水地域の住民移転に関してなんです。これはDPWH側は移転先地、代替地の用意をしておられるのかどうか、この2点について教えてください。

以上です。

○原嶋委員長 それでは、ちょっとまとめて後ほどお願いします。少し何人かの方にご発言いただいた後、担当のほうからまとめて回答の準備をお願いします。

掛川委員、お願いします。

○掛川委員 掛川です。説明ありがとうございます。

JICA事業部の方への質問です。前回はこのルート2-Bで一応採用案というものが進められていたわけですが、そこについて結果的には若干名の反対があつて、政府も断念されたということですが、今回は、コミュニティレベルでは少なくとも概ねこういった案件についての合意といえますか、協力するという合意はあるのでしょうか。また、こういった戻るようなことを避けるために、先方政府として以前よりも少し補償を変えるとか、今回も200戸ぐらいの方が移転ということになりますので、何かそういった工夫があるのかどうかということをお教えください。

以上です。

○原嶋委員長 ありがとうございます。

続きまして、鋤柄委員、聞こえますか。お願いします。

○鋤柄委員 聞こえていますでしょうか。

○原嶋委員長 聞こえています。

○鋤柄委員 事業部の方に何点が教えていただきたいと思います。一つは保護区と排水口との関係です。確か前回、全体会合でご説明いただいたときには700mと書いた資料をいただいたと思います。今回は当初案では200m、今回のルートXだと350mという距離になっていますが、このところは何か変更があつたのかという点が1点です。

それともう一つは、排水口は保護区のごく近傍のものですから、2haの埋立というような大規模なものではなくて、大深度からパイプのようなものが上がってくる説明図がありますが、それに工作物をつける程度の少し軽いものにできないのでしょうか。といいますのは、やはり埋立となると（保護区を含めた）周辺に相当影響が出るとお思いますので、なるべくそこは避けてやっていただきたいなと思います。埋め立てに比べ影響の小さいものにできないのか、その2点についてご教示いただければと思います。よろしくお願いたします。

以上です。

○原嶋委員長 ありがとうございます。

田辺委員、聞こえますか。お願いします。

○田辺委員 2点伺わせてください。

1点目は審査部への質問になりますが、今回このスコープ変更をご説明いただいた理由としては、このスコープ変更が何か重大な変更に対応するものであるという判断があつたのどうかという点が1点です。

それから2点目は、これはちょっとどちらかわからないんですが、前回の全体会合での説明時は協力準備調査というふうになっていたのが、今回は有償技術支援というふうに変更がなされているんですが、これはどのような背景、理由があつたのでしょうか。

以上です。

○原嶋委員長 どうも。

源氏田委員、聞こえますか。

○源氏田委員 聞こえます。

○原嶋委員長 お願いします。

○源氏田委員 源氏田です。

事業部の方に質問なのですが、今回、海中排水口から排水をするということで小規模の埋立をするというふうに伺っております。それで、そばにはラムサール条約で保護されている湿地があるというふうに書いてあるのですが、この海中排水口を造る埋立地自体辺りはどのような環境のところなのでしょうかとこのことを教えてください。マングローブ林があったり、あるいは湿原があったりというような、割に自然状況のいい場所なのかどうか、埋立地の周辺の状況について教えてください。

以上です。

○原嶋委員長 ありがとうございます。

谷本委員、聞こえますか。

○谷本委員 聞こえております。

○原嶋委員長 聞こえています。よろしくお願いします。

○谷本委員 1点、トンネルの掘削残土が200万m³と非常に多いと。これは助言のときにも指摘をされていますが、最終処理、それから、仮置場ですね。この大量の掘削残土は排水路の埋立に使うということはできないでしょうか。このあたりをちょっと教えてください。よろしくお願いします。

以上です。

○原嶋委員長 ありがとうございます。とりあえず一旦、錦澤委員、ちょっと待っていただけますか。すみません。

○錦澤委員 承知しました。

○原嶋委員長 それでは、よろしいですか。

今、小椋委員、掛川委員、鋤柄委員、田辺委員、源氏田委員、谷本委員で、田辺委員からのご質問は多分審査部に対するものだと思いますので、手分けしてご対応をお願いしてよろしいでしょうか。

○渡辺 よろしいでしょうか。

○原嶋委員長 お願いします。

○渡辺 お応えできるところをお答えさせていただいて、少し確認させていただくところがあるので、そうさせていただきます。

一つ目は田辺委員からいただいた協力準備調査か有償勘定技術支援かということですが、大きな枠組みとして有償勘定技術支援があり、その中の協力準備調査ということですので、特にスキーム等が変わったという事情はございません。

それから、鋤柄委員からいただいた大規模埋立ではなくてパイプが上がってくるということなのかと。ここは調査団から補足があればいただければと思いますが、先ほど申し上げたとおり、この9ページにある模式図ですと、すごく深いところを埋立てるように見えるかもしれませんが、ご指摘のとおりVertical Shaftということで排水のためのパイプが下から上がってくる形になっていて、最後、この排水口から排水されるわけなんですけれども、埋立の規模としてはそれほど大きなものではないというふうに今は認識しています。申し上げたとおり10.48mと書いていますが、海底が9.5mですので、1mぐらいの水深のところを少し埋立て排水のための施設を確保するという計画だと理解しています。

掛川委員からいただいたコミュニティでの概ねの合意があるのかということですが、今、関係の

バランガイというフィリピンの最小の行政単位で説明会を実施してきておりまして、いろいろ意見交換中と聞いています。8月にも会議を開いたりして関係機関との合意形成はしてきており、また、影響住民への説明会は10月にも予定されておりますので、そういった中でこれからいろんな反応が確認されていくこととなります。

ただ、それに先立ってどうしても合意が得られない地権者がいるということで、その計画は変えざるを得ないというのがフィリピン側の判断だと理解しております。

最後の谷本委員からのご指摘のトンネル残土が非常に多い中で、今回の埋立施設に使える可能性があるのかというところは、調査団からお答えいただくことはできませんでしょうか。

○原嶋委員長 調査団の方はどなたですか。

○三品 調査団からお答えさせていただいてよろしいでしょうか。

○原嶋委員長 まず、お名前を頂戴できますか。お願いします。

○三品 調査団で本案件の総括をしている三品と申します。

○原嶋委員長 お願いします。

○三品 この埋立にトンネルの掘削残土が使えないかということにつきまして、今回、トンネル掘削はシールドマシン1基をラグナ湖側の立坑から入れて、この9.7kmを掘るという計画をしています。そのため、トンネル掘削残土は全てラグナ湖側に出てきます。土捨場地の候補地はラグナ湖側となりますので、この残土を10km、道路で運搬して使うということができれば使えるといえれば使えます。その辺については、今検討しているところです。

あと、盛土というのは大体5万m³ですが、排水の立坑は直径25m、深さ75mぐらいあります。この掘削土の土量が大体5万ぐらいになりますが、その掘削残土の一部をこのリクラメーションの盛土に使うことは可能と考えて、これは今施工の工程をどういうふうにするかについて検討しているところです。

以上です。

○原嶋委員長 ありがとうございます。

それでは、渡辺さん、小椋委員、それと掛川委員からのご質問は、今回のルートXで移転を求める人たちにコンセンサスができていいのかという質問だと思うんですけども、ちょっと先ほどのお答えと若干、新しくという言葉が適当かわかりませんが、今回ルート変更によって移転をお願いする方々に反対はないかと。あるいは従来に比べて追加的な補償とか何らかの工夫とか考えていないかと、そういうご質問だったと思うんですけども、いかがでしょうか。

あと、小椋委員からは大深度地下に関する法制度、取水の住民の移転の方々の移転先の問題ですね。あと、鋤柄委員から従来の説明では700mとあったのがちょっと数字が違うんじゃないかという点ですね。あと、源氏田委員からは海中の排水の埋立地、これは調査団のほうの三品さんに伺ったほうがいいのかもかもしれませんけれども、埋立地の側の状況、特にマングローブの有無などのご質問がありましたので、ちょっと順次お願いしていいですか。

三品さんにお答えいただいたほうがいいのかということがあったら、三品さんにもお願いします。

○原嶋委員長 まず、三品さん、海中排水口の埋立地の状況を教えていただけませんか。

○三品 盛土部分ですね。

○原嶋委員長 排水する側の周辺の例えばマングローブとか広い意味でのウェットランドだと思う

んですけれども、生物の状況など、現状で把握しているところで結構ですので、ご説明いただけますか。

○三品 わかりました。

地形につきまして、今スライドに映っているリクラメーションエリアですね、緑で表現しておりますけれども、その左肩ぐらいにザポテ川が流れているのが少し見えるかと思えます。そのザポテ川の河口部の少し左側にさっき言いましたLPPCHEAというラムサール条約湿地とパークサンクチュアリみたいになっております。それとマングローブがあります。そこが大体さっき言いましたとおり現在の排水口よりも350mほど東側になるんですかね、そういう状況です。

埋立地の状況ですが、現地盤が9.5m、それで平均潮位が大体10.5mですから、1番手前、海側の低いところで水面からの海の深さは1mぐらいになります。1mから陸に向かって0mになるということで、今2haの埋立土量、

○小島 三品様、今音声が切れているようです。

○幡野 もしもし、聞こえますか。

○原嶋委員長 聞こえます。私のほうは聞こえます。

○幡野 では、続けさせていただきます。調査団の幡野です。

○原嶋委員長 大丈夫ですか。私のほうは聞こえています。

○小島 失礼しました。こちらでも聞こえております。失礼しました。

○幡野 では、続けます。

周辺の環境ですけれども、砂浜、主に砂利と砂で構成される裸地になっています。植生はほとんどありません。近くの住民の方、また、漂着物ですけれども、非常にごみが多い、漂流しているようなところですので、希少種、懸念されているマングローブや希少とされている動植物というのは、この地点では確認はされていません。先ほど三品が言ったように、下のほうのLPPCHEAというものはございますけれども、そこからも幾分離れていますので、その影響というのは直接的にはないというふうに考えています。

以上です。

○原嶋委員長 ありがとうございます。

それでは、渡辺さん、よろしいですか。先ほど小椋委員からのご質問、掛川委員からのご質問、あと、鋤柄委員からのご質問ですね。あと、小島さん、田辺委員からスコープ変更の重大性の判断についてご質問がありますので、お願いします。

○渡辺 小椋委員からいただいたご質問で50mより深いところ、大深度の土地の利用に関する規制であったり制度であったりというところですが、ここは特別な規制等はないと理解しておりますけれども、調査団のほうで情報がございましたら補足いただけますでしょうか。

○三品 50m以深については、用地買収、家屋移転の必要はないというのが2016年のRepublic Act、これは法律みたいなものです。ガバメントが出す法律です。これによって日本の大深度地下法とほぼ似たような表現になっています。50m以深については、事業者は土地収用、家屋移転を考える必要がありません。ただし、50m未満の場合は土地価格の20%を補償しなさい、そういうふう書いてあります。

○渡辺 取水口付近の住民移転に関する代替地の確保についても調査団で、現時点での計画があり

ましたらご説明をお願いします。

○幡野 代替地につきましては、今関係する自治体とDPWH、あと、NHAといって国家住宅庁というのがあるんですけども、そこと今どのような形式のもの、まず最初は代替地ですね、候補地を探すこと、あとはどのような構造物にするのかというのを今調査しているところですので、ここににつきましては、移転を希望する住民の方が全て移転できるように、また、各種希望があると思いますので、そこを考慮しながら決めていく作業をしています。

以上です。

○渡辺 ありがとうございます。

掛川委員からのご質問ですけれども、 balanガイという行政単位レベルでは説明会を始めています、特に今のところ大きな反対はないと伺っています。ただ、実際に影響を受ける住民の方々へもう少し細かい説明が10月に始まっていくので、その状況を見なくてはいけないということで、現時点で付加的なインセンティブを付与して別の対応をするという案は、フィリピン側からは提示されていないと理解しています。

鋤柄委員からご指摘いただいたラムサール湿地条約との距離、これは恐らく全体会合のとき、700mという記載になっていると思うんですけども、スコーピングのときにもう少し正確な数字で200mぐらいということでご説明をさせていただいたかと思います。いずれにしても、ルート2-B、そことラムサール湿地条約との距離は、より遠くなるというのが今回のルートXへの変更に伴う影響と理解しています。

事業部からは以上です。

○小島 田辺委員からいただいた質問について、加藤のほうから答えます。

○加藤 JICA審査部、加藤です。

今回のルート変更はそれなりに大きな変更ということで、まさに今回ご説明をさせていただきました。事務局としましては、スコーピングワーキンググループをやり直すほどの規模とは考えておらず、今回既にスコーピングワーキンググループで助言をいただいております、そこで相当詳細に検討いただいているので、その助言及び本日全体会合の場で説明させていただいて、そこでリスクと考えられる点を助言委員の皆様にご指摘いただいて、それを踏まえてDFRに向けて調査を進め、DFRのワーキンググループの場でご指摘の点も含めて詳細に議論をさせていただくということを考えています。

以上です。

○原嶋委員長 どうもありがとうございました。まだお三方、ご質問がありますので、続いてご質問をいただきます。

錦澤委員、聞こえますか。

○錦澤委員 大深度のことをお尋ねしようと思ったんですけども、先ほどの説明いただいた内容でわかりましたので、大丈夫です。ありがとうございます。

○原嶋委員長 ありがとうございます。

織田委員、聞こえますか。お願いします。

○織田委員 織田です。聞こえますか。

○原嶋委員長 聞こえます。

○織田委員 前の2-Bの計画のときはザポテ川沿いに非正規住民の居住地があるために移転が課題というふうになっていたと思うんですけども、今回のルートXはもっと深部をトンネルが通るということであれば、この非正規住民の居住地移転ということはもう問題にならないというふうに思っていますね。ちょっと確認です。

○原嶋委員長 ありがとうございます。

石田委員、聞こえますか。

○石田委員 聞こえています。

○原嶋委員長 よろしくお願ひします。

○石田委員 すみません、ちょっと周りがやかましいかもしれませんけれども、私の質問は先ほど課長がおっしゃられたようにスコーピングを開催されたということを知りつつ、さはされど、例えば今回はかなり大きな変更なんじゃないんでしょうか。見せていただいた6ページの図を見ると、本当に2-Bとは全然違うところでルートを設定して、大部分は地下だからいいだろうという話なのかもしれませんが、取水口のところと排水のところはやり方が完全に変わっているわけだから、排水口の生態系に対しても例えば先ほどお答えでは、希少種はいないから大丈夫ということでしたけれども、それでは前回スコーピングのワーキンググループの委員の皆さんがやっていただいた議論のレベルとはかなりかけ離れたことだと思うんですが、それをこうやって口頭でルートXの例えば取水口と排水口のところの詳しい影響評価の資料がなく、口頭だけでそうしてしまうのはちょっとレベルが揃わないんじゃないんでしょうかね。だから、何か大切なものを見落とす可能性があるのではないかと思います。

だから、私の提案は、もしルートXについて取水のあたりと、それから、排水のあたりの社会と自然環境、生態系への影響、全部含めて調査をしていただいて、そのうえでスコーピング委員会を開かないまでも何らかの形で議論の場が設定されるべきじゃないかというふうに思います。排水のところは要するに川へ流す予定だったので、前は検討したのを今回は直接沿岸域というか海そのものへ流すわけですので、埋立もするし、排水も海へ直接出ていくわけなので、もう全然計画が違うじゃないですか。海への影響というのはもう少し精査すべきだと思います。私はもう少しきちんとした資料を用意されて、議論ないしは審議の場があるべきだというふうに考えます。

以上です。

○原嶋委員長 田辺委員、聞こえますか。

今の件、田辺委員のご所見があれば教えてください。

○田辺委員 先ほどスコープのワーキンググループをやり直すほどではないという発言がJICA側からあったんですが、やる、やらないの境目というのがどういう判断をされたのかというのをもう少し詳しく教えていただければというふうに思っています。

特によくこういったスコープ変更の議論の中では、移転世帯200人以上という世界銀行の指標が出されるんですけども、今回のルートを見ると、相当の数なので、通常のカテゴリAの要件変更であれば、この規模であれば重大変更というふうに判断されるのかなと思ったので、ちょっとより詳しい判断基準を教えてください。

以上です。

○原嶋委員長 ありがとうございました。

それでは、まず渡辺さんに織田委員からのご質問でルート2-Bで予定されていた非正規住民の移転は、今回は必要がなくなったのかという点と、2点目は多分加藤さんでしょうか、今、石田委員あるいは田辺委員からありましたけれども、その点についてそれぞれお願いしていいですか。

まず、渡辺さん、聞こえますか。

○渡辺 ありがとうございます。

今回のルート変更に伴って排水施設側での住民移転は、非正規住民の方も含めて特に必要はなくなっていると理解しています。もし違えば調査団のほうからご指摘いただければですが、そのような認識です。

○原嶋委員長 調査団の三品さん、大丈夫ですか。今のご回答に特に補足はありますか。

○三品 地下を通りますので、ありません。

○原嶋委員長 それでは、加藤さん、お願いしてよろしいでしょうか。

○加藤 ありがとうございます。

重大な変更にあたるかどうかの線引きというところにつきましては、どれであれば重大な変更にあたって、そうでなければというところの線引きの基準を明確に説明できるわけではないのですが、今回のプロジェクト自体の路線ルート自体は変わっているというところである一方、住民移転等で考慮すべき視点というのは既に助言でもいただいた内容で大きく網羅されているかなと考えているところです。

一方で、排水口のところに埋立地が新たに作られるという点の変更点としてもございますので、そういったところも含めて今回の全体会合の場で皆様のご意見をいただいて、それを踏まえながら詳細に調査をしていくという形で対応できないかと考えています。この点はまさに助言委員の皆様の助言を得ながらどのように対応していくかということの結論を出したいと考えております。

○原嶋委員長 どうもありがとうございました。

それでは、一応今後のスケジュールのことも含めてですけれども、選択肢としては二つ、多分今のJICA側のお考えとしては、1月ないし2月ぐらいにドラフトファイナルレポートで、これは今表によるとドラフトファイナルレポートの説明とありますけれども、これはドラフトファイナルレポートのワーキンググループということなんでしょうか。ちょっと加藤さんかな、どなたか教えていただけますか。すみません。ドラフトファイナルレポートについてのワーキンググループは設置されるんですか。

○渡辺 その認識です。

○原嶋委員長 では、一応今資料にある2月ぐらいにDFRということはドラフトファイナルレポートだと思えますけれども、ここでワーキンググループの設置は予定されておりますので、ここで少なくとも変更後について助言委員会が深く関与することの機会は確保されています。さらに、石田委員あるいは田辺委員からのお考えによれば、スコーピングのワーキンググループをもう1度やるということの必要性について、ガイドラインのコンプライアンス上何か問題はありますか。やることがコンプライアンス上必要なのか、これは加藤さんかな、小島さんかな、お願いしていいですか。

○加藤 今回の件を受けて、仮にスコーピングワーキンググループを追加で行わなくてもガイドライン上のコンプライアンス違反ということにはならないと理解をしています。

以上です。

○原嶋委員長 一応今後の予定でいけば、スコーピングについてのワーキンググループをもう1度行うということの義務的な必要性は生じないけれども、予定としてはドラフトファイナルレポートについてワーキンググループを2月ぐらいを目処に開催して、その段階で助言委員会の関与を確保できるという理解でよろしいでしょうか。

○加藤 そのとおりです。ありがとうございます。

○原嶋委員長 石田委員、いかがですか。

○石田委員 聞こえておられますか。

○原嶋委員長 聞こえています。

○石田委員 やっぱりおっしゃることはよくわかります。手続の話もよくわかります。6ページのルートの再検討という図を見ると、かなり離れたところに設定して、あと取水口、もう何度も繰り返しになりますけれども、取水と排水のところで違う方式を、取水は一緒か。排水は違う方式を取っているわけじゃないですか。だから、その詳しい資料、その環境影響評価をした資料は要るんじゃないでしょうか。だから、私が心配しているのは、こういう口頭でみんなが質問することで単に答えるだけで具体的な資料は一切出てこないんじゃないかと。だから、スコーピング委員会でスコーピングのワーキンググループの人たちがやっていただいたときの議論のレベルを10とすれば、今やっている議論のレベルは3ぐらいじゃないですか。だから、その3のレベルで10の議論をしていたことと合わせてルート変更オーケーですという話になるのはどうも変な気がするんですけども、スコーピングも（※当該部、録音音声聞き取り不可）いただくのではなくて、どこかの段階でやっぱり資料を前回のスコーピング委員会並みの資料を検討する機会がないとおかしいんじゃないでしょうか。

以上です。

○原嶋委員長 田辺委員、聞こえますか。ご発言をどうぞ。

○田辺委員 ちょっと私は先ほど住民移転の数のお話をしたんですけども、それに関してはどのような認識かというのをちょっとJICAに伺いたいなと思っております。いかがでしょうか。

○原嶋委員長 渡辺さん、お願いしていいですか。

○渡辺 すみません。ご質問の趣旨をもう1度お願いします。

○田辺委員 質問の趣旨は、通常、重大変更で環境レビューをやり直すという要件の一つとして200人以上の住民移転の変更が生じているというのがあると思うんですけども、今回の場合はそういった200人以上の住民移転の変更というのは生じないのかどうかというのを伺えればと思いますが、いかがでしょうか。

○原嶋委員長 渡辺さん、お願いします。

○渡辺 今回の変更は、もともとのルートだと360戸だったものが200戸になるということで、戸数としては160ほど減るという変更が見込まれています。補足を審査部からお願いします。

○小島 田辺委員がお気にされているのはガイドラインの3.2.2のモニタリングあるいは実施段階において重大な変更が生じたときの扱いのときを想定されているのかなというふうに思いましたが、今協力準備調査の段階でございますので、3.2.2とはちょっと違う議論なのかなというふうに考えています。それも理解したうえでのご質問だったら失礼しました。

以上です。

○原嶋委員長 阿部委員、聞こえますか。

○阿部委員 聞こえておりますが、田辺さんが手を挙げているので、先にいかがでしょう。

○原嶋委員長 そうですか。では、田辺委員、お願いします。

○田辺委員 このモニタリング時の重大変更との差は理解しているんですが、少なくともこのときの重大変更の判断基準と今回のスコープの変更におけるスコーピングをやり直す段階での変更基準というのは、基本的には同じ要件が適用されるべきだというふうに考えており、200戸のまた別の住民移転が生じるということであれば重大変更と同規模の影響が生じているというふうに考えるべきではないかというのが私の意見です。

以上です。

○原嶋委員長 田辺さんにちょっと質問がありますけれども、重大変更ということになるときは、これはどこまで差し戻すということを求めることになるのでしょうか。

○田辺委員 まず、ガイドラインの中でのモニタリングの中で重大な変更が生じた場合は改めてカテゴリ分類を行って、レビューを行うというのがガイドラインの規定なんです。だから、この重大な変更という中で適用される変更の基準と今回スコーピングからやり直しましょうという基準は本来であれば一体のガイドラインなので、同じ基準でスコーピングからやり直すというのが基本的な立てつけなんじゃないかというふうに思うんですが。

○原嶋委員長 ありがとうございます。

阿部委員、関連でしょうか。阿部委員、聞こえますか。まずご発言いただけますか。

○阿部委員 阿部です。

JICAの方に伺います。今の話ともちょっと一部関係はしますが、私が確認したいのは、ルートXというのはルート2-Bを検討した際に同じ選択肢として検討に上がっていたものなんでしょうかということです。10ページ目のスコーピング案からの変更点というのを見ますと、基本的に経済性が落ちている、それから、工期が延びているということ以外は基本的にルートXのほうが優れた案であるというふうに見えるんですけども、なぜルート2-Bになったのかというのが今思うとちょっと疑問だなというのがありまして、確認できればと思いました。

以上です。

○原嶋委員長 どうもありがとうございました。

それでは、阿部委員からのご質問については渡辺さんをお願いして、コンプライアンスの件はもう1度加藤さんですかね、それぞれお願いしてよろしいでしょうか。

○渡辺 ルートXにつきましては、今回初めて検討されたルートになります。実際の代替案はルート2-Bよりも北側を主に検討されていまして、そちらは湿地に排水口が近くなったりですとか、大学に影響があったりですとかということで結局採用されなかった。確か全体会合のときも掛川委員からだったと思うんですけども、もう少し南のほうに行くことはできないのかというご指摘もあったと思うんですけども、南に行けば行くほど横断しなければいけない距離が非常に長くなってくるといふことと、南側のバコール州側も実は沿岸部分に開発計画を持っていて別の埋立の施設を作る計画を持っていたりということで、なかなか南側のルート案は検討されていなかったというのが実情です。

ただ、今回どうしても取水と排水のところの土地が確保できないということで、やむなくさらに

南ということで検討されたのが経緯です。

以上です。

○原嶋委員長 ありがとうございます。

加藤さんでいいですか。

○加藤 結構です。

田辺委員のご指摘は全くおっしゃるとおりでございますけれども、そのうえでカテゴリ分類に戻るかというと、本件は既にカテゴリAですので、引き続きカテゴリAということで変わりません。次に、スコーピングワーキンググループをやり直すかというところで、おっしゃるとおり被影響住民の範囲の場所が変わっているので、変更されたという点を踏まえて完全に新しいプロジェクトとしても1度リスクを分析して、スコーピングワーキンググループをやり直すかという点についての判断だと思っています。その点について、JICAとしては土地としても同じ特性を有しているところの範囲であり、同じようなリスクを抱えている地域での、より大深度でのトンネルを通すプロジェクトになるということで、今いただいている助言及びそこでご指摘いただいたいろんなリスクをJICAとしては踏まえながら調査をやっていくことで、今回のルート変更後の環境社会影響についてもうまくリスクコントロールができるのではないかと考えています。

例えば石田委員からいただいたような詳細な点はDFRの段階でご説明をさせていただいて、その時点でやはりDFRのワーキンググループ一回では納得できない点があり、追加的な調査が必要だということになりましたら、やむを得ないですけれども、もう一度別途の説明機会を設けるといような対応も考えるかと思えます。そのような形で調査の効率性とリスクコントロールをうまくバランス取りながら進めていけると良いなと考えている次第です。

以上です。

○原嶋委員長 織田委員、松本委員、それぞれ順番にお願いします。織田委員、聞こえますか。

○織田委員 ありがとうございます。

ちょっと戻りますが、先ほどの阿部委員のご質問に対する渡辺課長のご回答なんですが、実は前の案が4つあった中でルート2-Bが選ばれたわけですけれども、前の案のルート3というのはルート2-Bよりさらに南でして、しかも、深度も50mでしたから、今回のルートXとかなり近いと思うんですよね。さきほど前には南の案はなかったというご説明だったので、そうとは言えないのではないですかということが一つ。

それから、今回のようにルート2-Bを予定していたが都合悪くなったというときには、元に戻らないだろうかというのを不思議に思ったんですね。4つの案のうち一番いいということでルート2-Bを選んだわけですけれども、そのときのセカンドベストのようなものはどうだろうということを考えずに、ぱっと新しくルートXというふうに作られたというのはちょっと不思議で、今まで4つも代替案が出ていて、その中で選んだということとの整合性はどうなのかなと思いました。

以上、追加でお願いいたします。

○原嶋委員長 ありがとうございます。後ほど渡辺さん、お願いします。

松本委員、聞こえますか。お願いします。

○松本委員 ありがとうございます。

先ほどから石田委員、田辺委員、そして今、織田委員がおっしゃっていることというのが私も正

論だと思っけていまして、そうするべきではないかなと思っけています。一方でガイドラインの読み方としてそうしなければならないと書いてあるかというところ、確かに書いてあるわけではないとなると、ここで議事録は残りますけれども、最終的にはJICAの判断でそこは対応されてしまうことになるというところ、これは否定し難いことかなと思っけています。

そこで、私はあくまで田辺委員、石田委員、織田委員がおっしゃるようなことが正論であるという前提で、仮にその正論が受け入れられずに先ほど加藤さんがおっしゃったような方向で対応されるというのであれば、一つやはり助言委員会として、助言委員のメンバーとしていつも気にしているのは、スコーピング案から助言委員会が開かれ、ワーキンググループがあってドラフトファイナルに行くというプロセスを尊重すると、後戻りをあまり私たちもしない、つまりドラフトファイナルレポートでそもそもスコーピングが間違っていたんじゃないかという議論は、やはり我々も責任を持ってやっていますので、なかなかそこは自分では控えているつもりなんです。

しかし、今回の場合はこれほど大幅に変更してこのスコーピング案の助言委員会を改めて開かないということであれば、次のドラフトファイナルレポートでそもそもこういうのは調査したんですかとか、スコーピングに関わるような議論も認めるということは少なくとも議事録上は残しておきたいというふうに思っけています。これは当然もともと皆さんがご苦労されたスコーピング案の助言委員会の議論が、ある種、無になっているところがありますので、そこはお認めいただいて、次回ドラフトファイナルレポートのときにはスコーピングについても意見を言うことができるということは、ご了解いただいておいたほうがいいかなというふうに思っけていました。

以上です。

○原嶋委員長 石田委員、聞こえますか。どうぞ。

○石田委員 聞こえています。すみません、今外なのでマスクをしています。

織田委員が言っけていただいたこと、田辺委員、それから、今最後に松本委員が言っけていただいたことで、私も自分の考えが整理されてきたので、ありがとうございます。確かにスコーピング委員会はこのルートXについて新たに開くのはなかなか大変なことだと思っけていますので、開かないのであればドラフトファイナルに入る前にルートXについて調査した詳細な調査結果を見せる場を作ってもらおうかなというふうに提案しようかなと思っけていたんですけれども、でも、これでは結局スコーピング委員会になってしまうので、松本委員がおっしゃっけていただいたような形でドラフトファイナルのときに特にルートXについてのスコーピングについては、そこで議論ができるという形がいいのかなというふうに考えるようになりました。ありがとうございます。

以上です。

○原嶋委員長 渡辺さん、先ほど織田委員からご質問ありましたがけれども、以前の4案の中にルートXと近似したものがあるということのようだったんですけれども、二つ質問があって、近似しているかどうかということと、今回ルート変更するときには元の案に戻って議論はしたのかという2点まとめてお願いします。

○渡辺 ルート3、ルート4というのがあったんですけれども、ルート3については取水場所も排水場所もルート2-Bと同じで、そこを直線的に結ぶような案だったということで、ルート2-Bよりは南なんですけど、結局取水口と排水口が同じところですので、採用できないということでルートXとは違います。

ルート4についても取水口が同じところでした。排水口が少し南側になる提案になっていましたが、結局取水口のところが使えないので、今回のルートXはさらに南側に行かざるを得ないという案になっており、い同じ案がもともとあったというわけではございません。

以上です。

○原嶋委員長 ありがとうございます。

それでは、加藤さん、1月ないし2月に予定されているワーキンググループについてスコーピング変更とドラフトファイナルレポートを併せ持った形でのセッティングというのは可能なんでしょうか。実質的にも形式的にもどういう形になるかちょっと私も今ピンと来ないんですけれども、加藤さん、いかがですか。

○加藤 ありがとうございます。

今ご指摘いただいたようにDFRのワーキンググループを開催するという形としつつも、今回変更したルートについての新しい情報を提示することになりますので、そこについて新たに助言委員の皆様が疑問に思われるスコーピングに類するようなご質問も我々として対応したいと思いますが、主管部もそれで大丈夫でしょうか。

○渡辺 了解いたしました。

○加藤 原嶋委員長、よろしく願いいたします。

○原嶋委員長 石田委員、田辺委員、松本委員、織田委員、いかがでございましょうか。今形式的にどうするかはちょっとまたあれでしょうけれども、実質的には2月の段階で、これは必然ではありますけれども、これまでの変更も含めて詳細な情報をいただいてワーキンググループを設置するというところでございますけれども、いかがでしょうか。石田委員、田辺委員、松本委員、織田委員、お願いします。どうぞご発言。

○石田委員 異存ありません。

○田辺委員 今の整理、松本委員の整理とJICAの回答で承知しました。

○原嶋委員長 織田委員、いかがですか。

○織田委員 織田も異存ありません。

○原嶋委員長 あと、織田委員、先ほどの代替案のご質問は大丈夫だったでしょうか。

○織田委員 私は案件概要を見ておまして、今回のと前回あった3-Cの間にどのぐらい距離があるのかよくわからなかったんですが、今のご説明で今回ののはかなり南だということがわかりましたので、それで結構です。ありがとうございました。

○原嶋委員長 ありがとうございます。

それでは、これまでご質問いただいて、ご回答もあって、それに対してまださらにいろいろ補足などありましたら承りますので、サインを送ってください。

柴田委員、聞こえますか。

○柴田委員 柴田です。

すみません、今日ちょっと途中からの参加なので既に議論が出ていたら大変申しわけないんですけれども、今回ルートXで大深度を検討されるということで、これまでは大深度のオプションは検討されていなかったとなると、今ちょっと排水のところですか住民移転の話は出ていたんですけれども、地下水への影響についてのところでちょっと1点気になるところがありまして、通常の深

度が10mや20mの地下水であれば、沿岸部の近くなので、海水が普通に貫入しているようなところを放水路が掘られて通っていくことで、それはそんなに問題ないと思うんですけども、新たに大深度になってきた場合に不透水層というか、難透水層より下に水路が入る場合、それまで海水が貫入していないような帯水層にトンネルが入っていくことになるので、そういった場合にこれまで塩水化がしていなかったような帯水層に塩水が入ってしまうリスクについての事前の評価みたいなものは、もちろんそこまで入らないということが既にわかっているというのであれば問題ないと思うんですけども、これまで塩水化していないような帯水層にトンネルが入る場合はちょっとそのリスクがあるかと思えますので、この後、ドラフトファイナルのときになるかどうかわかりませんが、もしそういった懸念が地下の状況から考えられる場合は、ちょっと考慮いただいたほうが安全かなというふうに思いました。

○原嶋委員長 奥村委員、聞こえますか。

○奥村委員 奥村です。聞こえます。

○原嶋委員長 どうぞ。

○奥村委員 すみません、私も途中からだったので、もしかしたら議論されているかもしれないんですが、気になったのがルートX以外に何かオプションをさらに検討したうえでルートXになったのかというのがまず1点目。

もう1点目がルートXも取水口のところで住民の反対がまた起きた場合には、何かほかにオプションみたいなのはあるのかといったところと、また、今回みたいな形で全体会で同じような形でやり直す形になるのかということが気になりましたので、その点をご回答いただければと思います。

○原嶋委員長 ありがとうございます。

それでは、柴田委員からはコメントとして承ってもいいかもしれませんが、渡辺さん及び三品さんですか、地下水の問題は三品さん、もし所見がありましたらお願いします。渡辺さん、代替案の検討ですね、変更の段階で過去の代替案との検討とかほかの代替案の検討の有無のご質問がありましたけれども、渡辺さん、いいですか。

○渡辺 ルートX以外のさらなる代替案ですけども、例えば取水と排水の場所は南にずらさざるを得ないということで、今回それを直線で結ぶような案になっていますが、例えばもともとルート2-Bのほうにまでずっと迂回していくと道路があって、道路の下を通れるというような案も検討の俎上には上ったんですけども、そこまで大きく迂回するということは工期が延びたり、さらに経済性が難しくなるということで今回は採用されなかったという経緯はございます。

以上です。

○原嶋委員長 地下水の件は現在、所見はございますか、地下水の件。三品さんに伺ったほうがいいかな。

○三品 少しご説明いたします。

このラグナ湖とマニラ湾の間、大体10kmから15kmぐらいありますが、ここは去年か、一昨年か、タール火山というのが火を噴いて少し問題になりました。また、ラグナ湖側にはカルデラの跡もあります。何を言いたいかというと、ここら一帯は全て堆積した火山灰、凝灰岩でできています。ただし、それほど硬いものではなく、俗に言う軟岩と呼ばれるものです。マニラ湾からいうと、最高標高が大体30mから40m、少しこんもりした丘のような形をしています。表土は非常に薄く、ほと

んど全て凝灰岩でできています。堆積岩なので、層状に砂っぽかったり粘土っぽかったりシルトっぽかったりしますが、ほとんどは凝灰岩という形で作られています。ということで、今もボーリング調査をしています。岩盤自体の透水係数は非常に小さいです。軟岩ですから、大きな亀裂とかありません。ですので、もともと帯水層というようなものはありません。

ですから、海からの流入、トンネルを掘ることによって、海からの海水の流入によって帯水層が変化するという事はないと今は考えています。まだボーリング調査が進んでいますので、またご報告できると思います。

○原嶋委員長 奥村委員、聞こえますか。

○奥村委員 すみません。2個目の質問に回答いただいていたのかなと思ったんですが、ルートXの取水口のところでさらに住民反対が起きた場合というのはどういう形になるのでしょうか。どういう手順になるのでしょうか。

○原嶋委員長 先ほど多分掛川委員からご質問があったことと結構重なると思うんですが、渡辺さん、お願いします。

○渡辺 個別の影響住民の方々へのご説明はこれからになってまいります。バランガイ単位で今のところ反対はないと聞いていますが、住民の方々への丁寧な説明をこれからやっていくというのが現状です。

以上です。

○奥村委員 すみません。そこはちょっと私も伺っていたんですが、反対があった場合は、これはもう1回代替案を検討して、さらに検討するという形になるんですか。

○渡辺 今回ももちろんルート2-Bが最適だということは委員の方々にもご説明させていただきましたし、DPWH側ともいろいろ議論をしたり、調査結果を踏まえて決めていたので、一つでも反対があったからすぐに代替案ということではなくて、何とか反対されている方にご理解いただいてルート2-Bが進められないかということとずっと続けてきたわけですけれども、最終的にどうしてもその地権者の方の理解を得ることはできないだろうということ踏まえてフィリピン政府側が判断したということで、非常に異例の対応と思っています。

次の代替案でまた全く同じような反対があったらどうなるんだというのはなかなか見えないところがありますけれども、基本的にはここでしっかり理解をいただくしかない。また、どうしてもご理解をいただけない反対があった場合というのは、またフィリピン側としっかり協議をするということになってきますけれども、一つ反対があったらまたすぐ代替案ということではないと理解しています。

以上です。

○奥村委員 ありがとうございます。

○原嶋委員長 同じ轍を踏まないようによろしくお願いします。

ほかはございますでしょうか。

次回、2月に予定されているワーキンググループがありますけれども、そこでは先ほどのお話とおりルートの変更を含めて幅広くご議論いただくということで、情報提供もお願いしたいと思います。

いかがでございましょうか。ほか、ございますでしょうか。

もしなければ今回のご報告はここで締めくくりとさせていただきたいと存じますけれども、渡辺さん、予定としては2月ですか。まだはっきりしていないんでしょうけれども。

○渡辺 現時点では1月ないし2月を予定させていただいています。

○原嶋委員長 ありがとうございます。

ほかはございますでしょうか。

それでは、ちょっと時間も押してまいりましたので、本件のご説明はこれで終了させていただきます。どうもありがとうございました。

○渡辺 ありがとうございました。

○原嶋委員長 続きまして、小島さんでよろしいでしょうか。

○小島 事業部の皆さんが退席したら、続いてその他の議題に入らせてもらえればと思います。

次はホームページの改善について紹介させていただきたいと思います。

○原嶋委員長 お願いします。

○小島 では、加藤課長、お願いします。

○加藤 8月の全体会合の場でも阿部委員から口火を切ってご指摘いただきましたが、過去の情報の蓄積と活用という観点で、もう少し助言委員会での議論及びJICAとしての環境社会配慮の議論への過去の情報の活用を検討するような考え方も必要ではないかというご議論があったと思います。JICAとしては、検索機能を大幅に変えてわかりやすくするということはなかなかコスト的にも難しいところはありますけれども、現在ある枠組みの中で過去の事例を検索して、過去に指摘を受けた助言を新しい案件の類似のセクターあるいは国等でうまく活用できる方法はないかなということをお考えしてまいりまして、今回この10月からJICAのホームページにおきまして、助言委員会の助言、個別の案件に関する助言について簡易に類似のセクター、国等が検索できる機能を追加いたしましたので、ご紹介をしたいと思います。

具体的な使い方につきましては、今デモンストレーションの様子を画面に出しておりますけれども、環境社会配慮審査課総括の永井からご説明をさせていただきたいと思います。永井さん、お願いします。

○永井 審査部の永井と申します。

ただいまJICAのホームページを投影しています。こちらはトップページです。

環境社会配慮のページに移動します。こちらに助言委員会のリンクがございます。移動します。この中に助言委員会、ワーキングの議事要録、助言内容がございます。

移動します。こちらのページでは、冒頭に全体会合の資料が掲載されておりました、中ほどに移動しますと、ワーキンググループへのリンクがございます。こちらはこれまでアフリカ、アジアといったように地域ごとのリンクがございましたが、今回変更で一つのリンクに変更いたしました。クリックいたします。

そうしますと、このようにワーキンググループ、これまで開催した179件が一覧表で表示されます。今回、冒頭に検索バーを追加いたしました。こちらに入力することで検索が可能となりました。例えばちょっと少しやってみます。国名検索で例えば今ご説明があったフィリピンと入れますと、このようにフィリピンで開催したワーキンググループの資料が表示されます。次に、案件名、スキーム名なんですけれども、こちらは正確な案件名がわからない場合でもキーワード検索が可能とな

っておりまして、例えば道路と入れると、案件名に道路が含まれるワーキンググループがこのように表示されます。このほか、例えばメトロと入れるとこのような感じで表示されます。このほか、送電、こういう感じになります。

こちらはスキーム名での検索も可能でして、有償、無償といったもので検索することができます。例えば開発計画調査型と入れると、このように開発計画調査型でワーキングを開催したものが表示されます。

そして、スコーピング段階、DFR段階、環境レビュー段階、モニタリング段階でも検索バーがございます。こちらは例えば環境レビュー段階で助言がついたものを調べたいときにこのように入れると表示されます。この検索条件は組合せでも可能でして、インドで道路で環境レビュー段階で助言があるものとする、このような表示が可能です。

説明は以上です。

○加藤 今ご説明をしたとおりですけれども、できる範囲での改善になります。例えば助言文書のPDFの中にあるキーワードまで検索できるかということ、そこは今回の改善対応では難しいかなと思いますが、ある程度過去の事例が検索できるよう改善できたと考えております。

事務局からは以上です。

○原嶋委員長 ありがとうございます。

それでは、あまり長く時間は取れませんけれども、何か重要な点でご指摘ありましたら承りますが、いかがでしょうか。

阿部委員、どうぞお願いします。

○阿部委員 ご対応くださり、誠にありがとうございました。お忙しい中大変だったと思うんですが、これでまた活用できるんじゃないかと思えます。ありがとうございました。

○原嶋委員長 いずれにしましても、またいろいろ今後改善点がありましたら随時ご指摘いただいて、継続的に改善していただきたいと思っておりますので、よろしくお願い申し上げます。

加藤さん、もう1点ありますか。小島さんから、ごめんなさい。

○小島 ホームページのお話は以上でよろしいですかね。

○原嶋委員長 一応一旦締めくくりとさせていただいて、まだほかにありましたらどうぞ。

○小島 であれば、パブコメの話をさせてもらってよろしいでしょうか。

○原嶋委員長 どうぞ。まずはしてください。

○小島 9月28日に環境社会配慮ガイドライン改定に係る諮問委員会がありました。その中でパブリックコメントの結果と私たちの考え方を説明させていただきましたので、ご報告したいと思います。

パブリックコメントは助言委員あるいは諮問委員、あるいは元助言委員の皆さんからも意見をいただきまして、ガイドライン本体のほうは37の主体から268件のコメントをいただきました。この中には相手国機関とかほかの援助機関も含まれます。ご参考までに異議申立のほうには11の主体から54件のコメントをいただいています。これも日本語だけではなく海外からもコメントをいただいています。

ご参考までに、現行のガイドラインを作った際のパブリックコメントは、ガイドライン本体と異議申立要綱を合わせて56件のコメントがあったということで、そこから比べると皆さんのご関心が

非常に高くなったのかなというところでございます。

28日の諮問委員会においては、まさにパブリックコメントを出した方も参加されたいというところがあったと思いますので、緊急事態宣言下ということも踏まえてオンラインで傍聴を初めて試行しました。国内から20名ほどの傍聴者が参加しました。私たちから個々のパブリックコメントとそれに対するJICAの考え方を説明させてもらって、そこから座長のほうでまずは諮問委員、そして、その後傍聴者の方々から意見を得たというところでございます。

ガイドライン本体について出てきた意見としましては、今ガイドラインの改定においてはドラフトEIAを基に公開を始めるというところになってはいますが、それを最終的な許認可の取得をいつまでにするかというところがポイントになるのかなというところで、これは引き続き検討していくということになっています。それ以外に傍聴者の方から開発協力大綱の一部が引用されているけれども、ちょっと書きぶりが違うんじゃないかというようなところ、それとFAQの話あるいはGHGの話の根拠などについてご質問をいただきました。それぞれについて説明をしたところでございます。

要綱についても質疑、同じようにパブコメの内容を説明して私たちの考えを説明したというところでございます。これもいくつか傍聴者及び諮問委員の方から質問をいただいて、それぞれ回答したというところでございます。

いただいたコメントあるいは議論を踏まえて、次回は10月27日にまた改めて諮問委員会を実施する予定でございます。傍聴者をどうするかなどについて、あるいは議題などについては引き続き検討していくというところでございます。

以上が簡単ですが、9月28日に行われた諮問委員会の概要の説明でございます。

一つだけ言い忘れましたが、従来諮問委員に副座長として入っていただいていた村山先生ですね。元助言委員もやっておられたんですけども、JICAのホームページにも載っていますが、異議申立審査役に就任されることになり、利益の相反することから諮問委員のほうを辞任されるというところで、その挨拶も村山先生ご自身からあったというところをご報告いたします。

以上です。

○原嶋委員長 小島さん、パブリックコメントに対する回答のペーパーというのはもう公表されているんですか。今諮問委員ではない助言委員の先生方がそれを見ることはできるんですか。もしできなければ、いつ頃タイミングとしてはリリースされるんでしょうか。

○小島 諮問委員会の資料と議事録は公開します。ただ、どうしてもタイムラグがあって、11月の中旬頃になるのかなというふうに考えています。

○原嶋委員長 いずれにせよ、回答としては一旦書面化されておりますので、それが手続的に進めばやがてホームページ上でアップされるということで理解してよろしいでしょうか。

○小島 そのとおりでございます。一応今の考え方としては、日本語で来たものについては日本語でお返しして、日本語以外で来ているものについては英語と日本語で回答を作るというような考えでございます。

以上です。

○原嶋委員長 ありがとうございます。

それでは、これまでのところ、全体を通してで結構ですが、ご発言ありましたらサインを

送ってください。

これまでまだご発言のない委員の皆様も含めまして、何かご質問等ございましたら全体を通じてご発言いただきたいと思いますので、サインを送っていただきたいと思います。よろしいでしょうか。

それでは、特になければ事務局のほう、何か最後にありますか。あと、今後の日程ということになりますので、よろしくをお願いします。

○小島 今後の日程の前に、審査部の中において人事異動がありまして、次長をやっていた中曽根が異動してJICAの沖縄センターというところに週末の間、異動しました。後任で馬杉という者が来ておりますので、紹介したいと思います。馬杉次長、ご挨拶をお願いしてよろしいでしょうか。

○馬杉 馬杉でございます。聞こえますでしょうか。

○小島 聞こえます。

○原嶋委員長 聞こえますよ。

○馬杉 ありがとうございます。先週、審査部に着任いたしました馬杉でございます。よろしくお願いいたします。

先週、海外から戻ってまいりまして、今自主隔離中でございます。また、本来でしたら皆様と直接お会いしてご挨拶申し上げたいところでございますが、オンラインによる本会合の開催ということで、皆様のご理解、ご協力を賜っておりますためこのような形でご挨拶させていただきますことをご容赦賜ればと存じます。また、委員の皆様には日頃大変ご多忙の中、本会合に加えて日頃から個別案件へのご助言も賜っております。皆様のご尽力に敬意を表するとともに、改めまして御礼申し上げます。また、ガイドラインの改定プロセスについてもただいま課長の小島からご説明をさせていただいたとおり、おかげさまで議論が進んでおります。こうしたレビューへのご助言や包括的検討の実施につきましても、皆様の精力的なご協力、誠にありがとうございます。

弊構といたしましては、政策的な要望に応えつつガイドラインを委員の皆様とともに適切に運用し、環境社会配慮の質を担保するということが私どもの付加価値であると考えております。多方面にわたりまして、皆様のご理解、ご協力を賜りますよう引き続きよろしくお願い申し上げます。

以上です。

○原嶋委員長 小島さん、いかがですか。大丈夫ですか。

○小島 ありがとうございます。

○原嶋委員長 ご挨拶どうもありがとうございます。

○小島 引き続き次回の会合のご予定を確認させていただきたいと思います。

11月5日金曜日14時から、同じ時間でございます。緊急事態宣言は明けたと思いますが、引き続きこのようなオンラインでやらせていただけると幸いです。

事務局からは以上です。

○原嶋委員長 改めまして、馬杉次長にはご丁寧なご挨拶、どうもありがとうございました。

これまでのところ、ご発言をいただいておりますのは、私のところで承知している範囲では、作本委員、島委員、寺原委員、長谷川委員、日比委員、山岡委員、山崎委員、米田委員、含めまして何か最後ご発言ありましたらサインを送ってください。

どうぞ長谷川委員、お願いします。

○長谷川委員 すみません。今日は遅れまして状況がわからなかったもので質問させてもらわなかったんですが、最後に一言だけ。今回のフィリピンのパラニャーケで代替案が住民によって反対されたということで、一つ私気になったのは、代替案の検討の結果を住民に説明会で説明するという事はやっておいたと思うんですけども、今回反対にあった経緯というか、どこにそういった原因があるのかというのは、いわゆる代替案の検討、実施者側の代替案の検討のところに問題があったのか、あるいは説明をするといったあたりのプロセスのところでは何かあったのか、こういった中身と、それから、いわゆる形態の話になると思うんですけども、どちらがうまくいかなかったのかというのをやはりこれはあまりないようなものなので、ここは一つ改めてしっかり検討して、後々同じようなことが起きないようにということができたらいいかなと。感想でございます。

以上です。

○原嶋委員長 ありがとうございます。

作本委員、聞こえますか。どうぞ。

○作本委員 ありがとうございます。

今日はいろいろ進展を聞かせていただきまして、ありがとうございます。やはり気になりますのは、今長谷川委員からのご照会もありましたし、松本委員がいろいろお話しされていましたが、重大な変更について前回も確かこのAカテゴリ、ほかのカテゴリから議論があったかと思しますので、このあたりは1度今後もこういうことは生じるかと思しますので、整理する機会があればありがたいなと思います。

以上です。ありがとうございました。

○原嶋委員長 どうもありがとうございました。確かにおっしゃるとおり変更案件が最近多いんですけども、小島さん、何か理由はあるんですか。特にないんですか。

○小島 実施中の案件において変更が生じているのは、きっとガイドライン施行から10年経って、調査が終わって、入札が終わって本体に至っている案件が増えてきて、それが変更になっているので、最近数が多いのかなと。まさに今週金曜日に高速鉄道の変更の話もさせていただきます。実施中の案件において重大な変更が起きたときにどうするかということについては、ある程度ルール化というか、皆さんの理解は進んでいると思います。今回のように調査中に大きな変更が起きてというのは、私自身ここに来てから初めてで、あまりないものなのかなと思います。だからこそ、今回丁寧に説明させてもらったというところ、丁寧のレベルが皆さんのご意見はあると思いますが、全体会合で説明させてもらったというのが経緯だと思います。

整理というのもそうですけれども、皆さんがある程度納得あるいは経緯も踏まえて進める必要があるのかなというような問題意識はあると思います。

以上です。

○原嶋委員長 ありがとうございます。

ほかはございますでしょうか。最後になりますけれども、ご発言のご希望がありましたらサインを送ってください。

事務局のほうはよろしいですか。小島さん、よろしいでしょうか。

○小島 ありがとうございます。大丈夫です。

○原嶋委員長 それでは、よろしいでしょうか。

それでは、特になければちょっと時間が長引いてしまって大変恐縮ですけれども、これで締めくくりとさせていただきますけれども、よろしいでしょうか。もし何かありましたらサインを送っていただけますでしょうか。

それでは、大変長い時間、どうもありがとうございました。第129回の全体会合をこれで終了させていただきます。

どうも本日はありがとうございました。

15:39 閉会